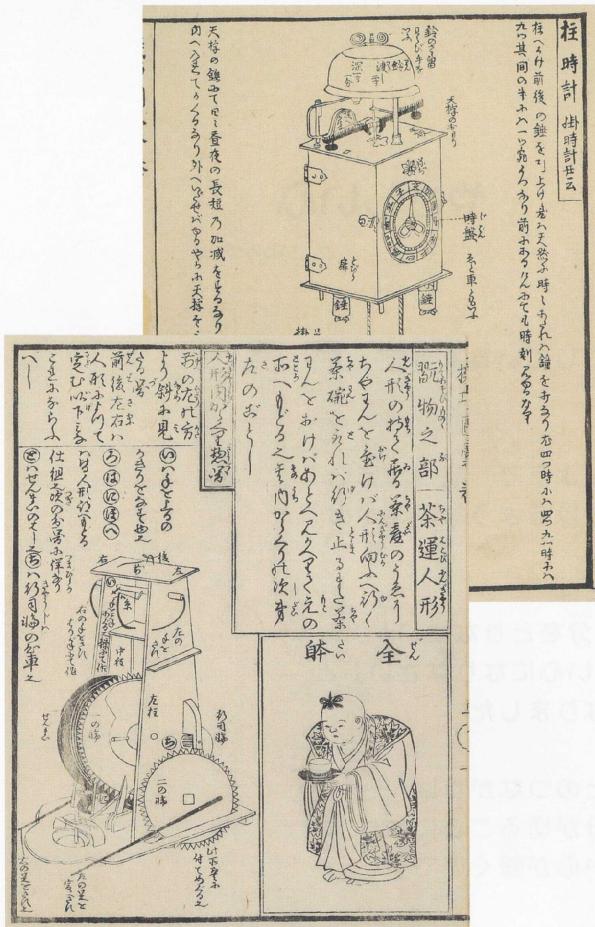


機巧図彙



▶【からくりずい・きこうずい】

細川頬直著

3冊

寛政8(1796)年刊

縦22.8cm 横16.1cm



❖特殊な時刻制度に対応した江戸時代の和時計

『機巧図彙』は首巻と上下巻からなる三冊の本です。首巻には和時計の作り方が三種類、上下巻にはからくり人形の作り方が九種類掲載されています。和時計と呼んで区別するのは、それが日本で作られた機械時計であり、当時の日本の時法に合わせたつくりになつているからです。

この頃の日本はまだ「子の刻」、「丑の刻」あるいは明け六つ、暮れ六つ等と言つていた時代でした。図版の柱時計の文字盤にも、十二支が書かれています。一刻の長さは昼と夜で異なり、また季節ごとでも変わります。

もう一枚の図版にある「茶運人形」は、その名の通り茶碗を運ぶ人形です。右上には、茶運人形の説明が書かれています。

「人形の持て居る茶臺のうゑにちやわんを置けば人形向ふへ行く」人形の持つ茶台の上に茶碗を置くと、人形は進みます。「茶碗を取れば行き止る」茶碗を取ると、その場に止まります。

「また茶わんをおけばあとへ見かへりて元の所へもどる也」飲み終えた茶碗を再

時計の図の左側にある文中に「錘にて日々昼夜の长短の加減をするなり」とある。ようしてこの時計は錘を用いて日々の一刻の長さを調整していたのです。

び茶台に置くと、人形は後ろを向き、元の場所へ戻ります。昨今の飲食店には配膳口ボットがいる所もあります。度々話題になりますが、茶運人形は江戸時代の配膳口ボットと言えるでしょう。

著者はからくり半蔵とも呼ばれる土佐(高知)出身の細川半蔵頬直。天文学、歴学、数学を学び、寛政七年(一七九五)幕府の改暦事業に携わりましたが、残念ながら完成前の翌寛政八年に亡くなりました。

時計やからくりの仕組みを図解した本は大変珍しく、江戸・大坂・京都の三都で出版されており、当時の人気が窺えます。

(天理図書館 池谷 礼)

<天理図書館のお知らせ>

Tel 0743-63-9200 URL <https://www.tcl.gr.jp/>

◇平日(午前9時~午後5時半) 土・日・祝(午前9時~午後4時半)

○12月の休館日: 4日・11日・18日・23日・25日 / 年末年始12月27日~1月6日

(本欄にて紹介した名品の閲覧については係へお尋ねください)

※最新の情報については公式HP、Twitterでご確認ください。